

05・えっち動画買ったのがバレて、嫉妬攻められ鑑賞会からの乳輪のおつきさチェック

『04・朝からオナニー告白されて、ぬるぬるおま●こについて解説させてから指ハメガチセックスで連続絶頂させてあげる』から約一時間後。

土曜日、朝八時ごろ。

天気は晴れ。気温も心地よいあたたかさで、とてもよい春の朝だ。

場所は主人公の自宅内居間の、『ごろ寝ソファ』の上。

あれから主人公とイヴはとりあえず朝食をとり、食後しばらくして、さっそくそこへ寝転がっている。

この『ごろ寝ソファ』は、主人公がイヴと居間でごろごろするためだけに購入した、つまり、居間でセックスする時用のアイテムである。

それはダブルサイズで、布団のように横幅があり、二人で寝そべる事が出来る。

だから居間で過ごす時の二人は、ここに座って仲良くおしゃべりをしたり、ゲームをしたり、テレビや映画を見たり。また、そんな過ごし方にも飽きてきた頃には、お互いに寝ころびながらちよっかいを出して、そのままいちやいちやするなど……。

つまりそういう、えっちな行為にスムーズに移行するのに非常に適した代物として、愛用しているのだった。

そんな二人は今、一緒にタブレットで動画視聴している。  
この動画は、スマホでも見られる。また、テレビでも見られる。  
なのに、主人公は今、なぜかタブレットを使って鑑賞会をさせられている。  
イヴが『できるだけ大きな画面で。でも、近くで、寝ころびながら見られるように』と  
所望したからである。

では、具体的に何を見ているのかというところ……。  
レズビアンもののアダルト動画である。

### 〈※作品情報※〉

教師と生徒のカップルの、レズビアンものアダルト動画。

甘々でラブラブなテイストの学園もので、セックスシーンもソフトなもののみ。  
つまり、見つかっても比較的言い訳しやすいタイプの作品。

内容はおおむね同じシチュエーションを、複数の組み合わせ、かつ重複なしで演じるタイプで、女優は合計八人。つまり四組のペアが、一組四十五分ほどの持ち時間で、校内でいちやいちやする内容になっている。

今は二組目のシーン。

主人公の堅物教師が、相手役である清楚系ビッチな生徒にすっかり夢中になり、身体を重ねまくった結果、最後はあっさりビッチキャラを捨てた生徒と相思相愛ラブラブになるストーリーである。

今は、生徒役の女優が教師役の女優に攻められ、保健室のベッドに押し倒されているところ。

教師役曰く、生徒役が可愛すぎて、我慢ならなくなったらしい。

そんな生徒役『みゆ』を演じる女優は、小柄で胸の大きな、可愛いタイプだ。

声が高くて、話し方もゆったりと甘々。『あざとい』と評されるみゆのキャラクター像に合わせた仕草や話し方を、完璧に熟知している。

清楚系ビッチなみゆを演じるにふさわしい、イヴとはまるで違うタイプの女性である。なお、作中では学生を演じているが、女優自身は、明らかに二十代半ば以上に見える。

つまり、イヴは何ともいえない気分である。

確かに、これがたとえば『熟女お姉さまもの』や『ロリもの』であるよりは、『教師と生徒もの』であった方が主人公と自分の関係に近くて嬉しいと言えは嬉しいし、内容も『ハードでえぐいもの』であるよりは、この『ラブラブあまあまなもの』である方が、気軽にツツコミを入れやすい。

だが、肝心の生徒のタイプが、自分とまるで違うのが気になる。  
正直なところ、胸が大きい事くらいしか共通点がない。

『主人公は巨乳の女性なら誰でもいいのだろうか』とムカムカしている。

なお、イヴはこれまで一度もAVを見た事がないので、その構成をよく知らない。  
パッケージ画像も、一瞬しか見ていない。

なので、この作品にはあと三組、六人もの女優が出演しており、多様な体型の女性が登場する事、このペアにおいて、主人公はどちらかと言うと生徒役よりも教師役に注目していた事。作中には展開は同じだがキャラ設定が逆の『エロ女性教師と堅物生徒』のパターンもある事……などは、まったく知らずに見ている。

▲1 アダルト動画を鑑賞している。なので、▲2までは『タブレットから流れてくる音』として、わざと少し音質を悪くする

〈生徒役・みゆ〉

●中央

「※3回※ 激しくキスする」

んっふ、んっく。んー♥

【甘々に媚びたロリ系の可愛いアニメ声で。

イヴがどんなに頑張っても出せない感じの可愛いアニメ声】

せんせえ……ダメだよ。学校でえっちなんてしたら見つかったらやうよ♥

【愛撫され始めて、可愛く喘ぐ。

まったく嫌がっていないし、セックスに対してノリノリ】

あっ♥ や♥ だめ……♥ 恥ずかしいよお♥

先生のえっち……♥」

SE1 生徒役がベッドにばさ！ と倒れる音

【最初から最後まで流す】

〈生徒役・みゆ〉

●中央

【※3回※ 甘ったるく、ゆっくりと呼吸する】

はあ……はあ……はあ……♥

【少し間をあけてから。

わざともったいつけている感じで】

もお……そんなにしたいの……？

【甘々に問いかける】

女の子同士のえっち、そんなに大好きになっちゃったの？

しょうがないなあ♡」

SE2 生徒役が自分の片足を上げて、教師役とカメラに向かって股間を見せつける音  
【最初から最後まで流す】

〈生徒役・みゆ〉

●中央

「【嬉しそうに】

ほら♡ おいで♡

「一呼吸おいてから。

嬉しそうに。『みゆ』は一人称としての『みゆ』

みゆとおまんこく

▲1 ここでアダルト動画が唐突にストップする

▲2 セリフの途中で、『ブツリ』と、唐突に停止する。以後のセリフは流さない  
ちゅくちゅしょ……？？」

なのでイヴは『セックスシーンはまさにこれから！　ここから見どころ！』という所で、無慈悲にも一時停止ボタンを押す。

これによって『大寫しになった生徒役の股間を二人で眺める』という、主人公だけが実に気まずい場面を作り出してやるのだった。

●左　至近距離

「普通に感心している。

主人公に、この場面をよりく見せるために動画を一時停止して、現在タブレットに映し出されるアダルト動画では、みゆ役の女優が大きく足を開いている。そんな彼女の身体が非常に柔らかく、まるで体操選手のようなので」

おおわ。すごいね。

見て。足、こんな開いてる。

「みゆ役の女優の経歴について、推測を述べている。

彼女の身体の柔らかさの秘訣について、普通に興味を持っているので」  
体操とかやってたのかな、この人」

イヴ、主人公をえっちな気分させるために、ひそひそとささやく。

●●左 ささやき ※マークのセリフまでささやく

「『こんなに』を強調して。」

ここから※マークまで、普段の口調のままながらも、にやにやと、わざとえっちな事を言って主人公を煽る。

また、今日までさんざんこの動画を楽しんだであろう主人公に、チクチクと嫌味を言う」  
こんなに開くんだったら、すっごい深くおまんこ当たりそうだね。

【少し間をあけてから。

ひそひそと】

えっちしたら、きつと気持ちいいよね♥

【『嫌味』の割合が大きくなってくる】

先生も想像したんでしょ。

【『、』ごとにゆっくり区切って、一つ一つしっかり聞いてもらう】

あの女優さんのあそこに自分のクリ擦り付けて、気持ちよくなるの、想像したんでしょ」

※

〈主人公〉

「し、してないよおお………!」



——ああ、どうしてこんな事になってしまったんだあ……！！

主人公、半泣きになりながら返事をするが、さっきから何を言ってもとりあってももらえず、ひどい目に遭っている。

主人公は今朝からずっと『自分は決してそのような意図でこの動画を観た訳ではない』と否定しているのだが……状況がまるで好転しないのである。

確かに主人公は先日、先ほどイヴが見せた購入記録の通り、このレズビアンものAVをレンタルした。

しかしそれは、女優さん達の演技を通じて、己の性的欲求を満たすためではない。いや、厳密に言えば性的好奇心を満たすための購入ではあるのだが……とにかく、イヴが想像しているのとは、ちよつと違っている。

事実、イヴの指摘は実態とは違っていた。

主人公は、自分と『みゆ』のセックスなんて、全く想像していないからである。確かに初めて観た時は『あんなに足が開くなんてすごいなあ』とは思った。

だが、『もし自分もあんな風に身体が柔らかかったら……』と想像する時、相手はもちろんイヴだった。

主人公は想像の世界で異様にくねくねになった身体を手に入れ、それを駆使して、イヴをしつこく、だが丁寧によがらせた。

だが、一通りえつちな妄想にいそしんでから『いや、そうじゃない』と自分つつこみを  
して、ごく真面目な『研究』に戻ったのである。

つまり主人公は、大切な『研究』のためにこの作品を視聴した。

イヴにはそれをご理解いただきたいのだが、具体的に何の研究をしたのかは、ちよつと  
告白しづらい。

……なので、このような状況になっているのである。

ちなみに販売サイトでは、『レンタルでも『購入』と表現される。

『一時的な視聴権を買う』という意味で『購入』扱いなのかもしれないが、デジタルコ  
ンテンツ購入初心者の主人公には、その辺はよくわからない。

つまりイヴはこの点においても『レンタルではなく買った』と誤解している可能性が高  
い。

だが、これを訂正しても火に油を注ぐだけのような気もする。状況は予断を許さない。  
いつその事、さっさと打ち明けてしまった方がいいような気もするが……。

主人公、思う。

だが、言えない……！

たとえ誤解を解くためとはいえ。

わたしはイヴちゃんをさらに上手にいじめるために。

具体的には『イヴちゃんのデカ乳輪♥』とからかうために。

イヴちゃんと他の女の人の、乳輪のおつきさを比べるためだけにアダルト動画を観ていました。

だなんて……！

と。

前述の通り、主人公はイヴの大きめの乳輪が大好きだ。

一生見たいし、触りたいし、これをネタにいちやいちやエロエロしたいと思っている。

……しかし、それには一つ問題があった。

それは『イヴのそれは、本当に確実に平均よりも大きいのかどうか、確証が持てない』という事である。

主人公はイヴと付き合うまで、特に乳輪フェチというわけではなかった。

また、たとえ主人公が生まれつきのおっぱい好きであったとしても、周囲の人間の胸をじろじろ見るなんてするはずもない。

つまり、比較用のサンプルが自分しかないのである。

結果、現状ではイヴを乳輪の大きさをネタに言葉攻めしようとしても『自分のと比べると、ずいぶん大きいような気がします』『他の人のは見た事ないので、自信はありませんが……』としか言いようがない。

これでは今一つ決め手に欠ける。『自分がずいぶん小さいだけ』という可能性も捨てきれないからだ。

だが、ここから根拠を得るには、サンプルを集めるのが困難だ。

繰り返しになるが、無関係の一般市民をいやらしい目で見るなんて方法は論外だ。

イラストならお金の許す限り見放題だが、創作である分、どうしても作家の好む部分が強調されがちだ。そのため、これだけを参考にすると偏りそうである。

だから、正規の方法で、合法的に乳輪を見る方法を考えた結果……主人公はAVに行きついたのであった。

その証拠に、この作品は『多数出演もの』である。

要するに主人公は『よし、これなら一作品で八人分の乳輪が見れる。検索結果の中では最高効率だ!』と思って選んだのだ。

かくして主人公は、この作品をリーズナブルな一週間レンタルで購入。ずいぶんとしよ

うもなくはあるが、真剣かつ強い情熱をもって、乳輪サイズの研究を始めた。

その結果『やはりイヴは大きめである』という結論に至った。

サンプルが合計十人というのはまだ少ない気もするからおいおい増やしていくとして、ひとまず『イヴの乳輪が大きいかもしれない』という仮説は、さほど間違っていない』という事については、確認したのだった。

なのであとは、視聴可能期間が終了するのを待つのみ。

その後、動画は自動的に視聴不可能になり、アプリにデータは残らない。

主人公の完全勝利が訪れるはずだった。

はずだったのだが……。

### ●左 至近距離

「少し疑いながら。」

『信じたい所だが、微妙だな。もし見たのが自分だったら『一切想像しませんでした』  
とは言い切れない』と思っている」

してないの？ ふーん？

【なので、早々に許す。

自分がこのように考えている事を指摘されると不利になるので】  
まあいいや。

【さらっと話題を変える】

で。つまりこれが。私が部屋で見つけた『デジタル商品購入完了のお知らせ』の紙にあったデジタル商品で。

今止めたここが。このAVで先生が一番好きなのところ？

【しれっと言うが、内心妙に収録時間が長いのが気になっている。

『えっ……合計約三時間って、一般的な映画よりも長い……？ キヤスト二人だけで、そんなに何するの……？』と不思議に思っている】

全部で三時間もあるのに、えっちなサイトで買ってから、ここばかり繰り返し、何回も見たって事でいい？」

この通り、先ほど、唯一の証拠が見つかってしまった。

購入時に自動送信される、『デジタル商品購入完了のお知らせ』というメール……を印刷した紙を、イヴに見つけられてしまったのである。

かくして主人公は、このようにぶちぶちと嫌味を言われる運びとなった。

それはもうしょうがない。構わない。構わないのだが……イヴの反応が、いまひとつつかみきれない事が今直面している問題だ。

主人公が見るに、ひとまずイヴは『AVなど見おって！』と怒っている感じではない。むしろ『こんなの好きなんだ♡』と楽しんでいるようでさえある。

だが、さっきから、言葉や視線が何だか痛い。言ってる事とやってる事が、微妙に矛盾している。

これは一体、どういう事だろう……？

主人公、少なめの知恵を絞って考える。

うう……イヴちゃんの気持ちが変わらない……。どうしよう……。でも、とりあえず、ここはイエスと言おう。

イヴちゃんの予想はちよつと間違っているけど、わたしがこのペアのシーンばかり見てたのは事実だし。だって、二組目の先生役の女優さんの乳輪が一番おつきくて、めっちゃ何度も止めて観ましたからね。

……いや、いっそ正直に『この作品は、今後イヴちゃんのおっぱいをより堪能するために観ました』って言った方がいいのかな？

でも、わたし、イヴちゃんのデカ乳輪が好きすぎて、逆に話題にした事ないからなあ……。

乳輪ネタは、大きな研究が終わってから解禁するつもりだったからなあ……。唐突すぎて、信じてもらえない可能性があるかも……。ううう。ど、どうしよお……。

〈主人公〉

「はいい……」

主人公、ひとまず認めるも、次の一手がつかめない。  
対するイヴは、そんな主人公の顔をしっかりと見るため、一度中央に戻る。

●中央 至近距離

「満足気に。さっきから、微妙にすれ違っている事には気づいていない」  
ふふふふ。正直だね。

「しれっと、優しくからかう」

もう、先生もアホだね。

家計簿つけるだけならさ、わざわざメール印刷しないで、値段だけ控えとけばよかったのに。

レシートとかと一緒に置いとくから、落つこととして。見つかったらやうんだぞ」

〈主人公〉

「あうう……」



主人公、がつくりとうなだれる。

確かにこれに關しては、すべてご指摘の通りである。

主人公は最近、将来を見越して、家計簿をつけ始めた。

今からしっかりお金を管理できる女になって、よりイヴの伴侶にふさわしい女性を目指そうと考えたのだ。

だが、今回これが裏目に出てしまった。アホである。

……しかし、アホ扱いされるのはいい。

主人公が今回もつとも心配しているのは、イヴがこれを『浮気』とみなす事だ。

研究の件を話すのは恥ずかしいし、正直に言っただけ、信じてもらえないかもしれない事は怖い。

だが、このまま黙っている事で、誤解されてしまうのはもっと困る。

主人公はイヴだけを愛しているし、他の女性の身体を見て欲求を解消しようなど、思っていない。AVを見た事は断固、浮気ではないのだ！

もつとも、この主張はよわよわだ。

イヴを納得させられるだろうか……？

〈主人公〉

「あ、あの……」

●中央 至近距離

「きよんとしてたずねる。」

主人公が何を言おうとしているのか見当がつかない」  
ん？」

〈主人公〉

「えっちな動画なんか見て、イヴちゃん怒ってりゅ……？」

主人公、やはり半泣きになりながら、イヴにたずねる。

聞きづらい事ではあるが、まずはこれをはっきりさせておこうと思ったのだ。

●中央 至近距離

「くすくす楽しげに笑いながら。」

実際怒っていない。嫉妬ごっこをして主人公をからかいたいだけなので」  
怒ってないよ。

「それによく考えれば、こういうのはプライベートなものであり、嗜好は個人の自由である。つまり、冗談でからかっているだけとはいえ、イヴが主人公の嗜好にコメントする権利はないので」

偶然とはいえ、勝手に見つけたのも『見せて』って言ったのも私だし。

「ちよつと口調がもごもごしてくる。

考えれば考える程、だんだん申し訳なくなってきたので。

しかし嫉妬する気持ちもあるので、理屈を付けて正当化を始める。

だって、よくよく考えれば、そもそも悪党は自分の方だ。人の秘密を暴いているのだから。

なのに、優しい主人公はこれを指摘せず、それどころかシユンと小さくなっている。

イヴはそんな主人公がいとおしくて、自分を責めない優しさが嬉しくて、『大好きだ!』という気持ちがじわじわと強まっていく」

……でも、彼女としてさ？

先生がどういうの見てるのかは気になるじゃん？

だから見せてもらったの♡」

しかしイヴは、やはり怒ってはいないようだ。

それどころか、だんだん、なんだかばつが悪そうに、もごもごした感じになってきた。

ここで、主人公は気づく。

真面目なイヴの事だ。もしかすると、偶然とはいえ、購入記録を見つけてしまった事。冗談交じりとはいえ、主人公の嗜好をしつこくたずねた事を、申し訳なく思い始めているのかもしれない。

イヴ、左に移動して、左耳にささやく。

●●左 ささやき ※マークのセリフまでささやく

「にやにやと、嬉しそうに尋ねる。

さっさと話題を『追及』から『単なるえっちな話』に変える事で、空気を変えようとしている。

なので、もう少しも怒ってない」

で。先生はどういう時に、どういう気持ちで買うのさ。こういうの♥※

〈主人公〉

「『すっごいイヴちゃんってっしたいけど、今イヴちゃんを呼ぶのはおかしいだろ』って時です……♥」

だから主人公は

ああ、イヴちゃん、そんな事に心を痛めないで。

悪いのは全部わたしのだから……。

と思いつつ、ひとまず様子を見る事にする。

この期に及んで『どうにかして研究の事を隠せないだろうか?』と抵抗しているのである。

しかし、嘘はついていない。

主人公は、百パーセントイヴを想って、この作品をレンタルしたからだ。

● ● 左 ささやき ※マークのセリフまでささやく

「にやにやと復唱する。」

主人公がノツてくれているし、声が何だかニヤニヤしているので『不快にはさせなかつたらしい』と安心し、調子が戻ってくる」

へえ。すっごいセックスしたいけど、今すぐ私を呼ぶのはおかしいだろうって時に買うんだ。

『考えられそうなタイミングを述べる』

夜中とか？」※

〈主人公〉

「そうです……♡」

お、お、お。いけるか？

主人公、ごまかせそうな雰囲気の到来に『もしかするとこのまま隠し通せるかも』と、ちよつとドキドキしてくる。

しかし、これがいけなかった。

イヴの追及の手は、さらに深い方向へ伸びたからである。

●●左 ささやき ※マークのセリフまでささやく

「にやにやと、さらにたずねる」

ふーん。

で、夜中にこれ見ながら一人えっちすんの？

『私じゃない』を強調して。

主人公がAVを見る事自体は構わないが、やはり『みゆ』が自分とはタイプが違いすぎ

る事がなんだか腹立たしい。

でも追及する事自体には罪悪感を覚えている。実に複雑な心境】

私じやない女の人の裸見ながら、私じやない女の人があへあへしてるの聞いて、クリとかさわんの？ 自分のナカ、ぐぼぐぼしちゃうの？」※

〈主人公〉

「あうあうあ……」

し、しまった。

これなら、最初から正直に言えばよかった！

だって触ってないもん。触ってないもん！

ガチで観察してたからね！

真実を打ち明けるきっかけを失った主人公は、新たな疑念をかけられ、あわあわする。

正直な所、これはこれで心地いい。好きな女の子に嫉妬されてチクチク嫌味を言われるのなんて、ぞくぞくする。最高だ。

ただ、いくら怒られるシチュエーションが幸せだからと言って、してない事を、している事にされるのは困る。

どのタイミングで打ち明けるべきか……。

主人公の悩みは深まっていくが、イヴはこれに気づかず、沈黙を肯定とみなしたようだ。

●●左 ささやき ※マークのセリフまでささやく

「にやにやと、さらにたずねる」

答えられないって事は、そうって事でいい？

【少し間をあけてから。

だが、主人公が回答する前に、そうであると仮定して話している】

うわあ。先生のえっち。

性欲魔人（せいよくまじん）。どすけべ女」※

〈主人公〉

「あうう……お願い♥ 許して、イヴちゃん♥」

このようにイヴはノリノリでいじわるをしているが、心の奥底では、先ほど芽生えた罪悪感をぬぐい切れずにいる。



イヴは正直、ほのぼの、いちやいちやとした言葉攻めプレイがしたくて、購入記録の件をつつこんだ。

しかし、ささやかな秘密とは言え『人の秘密を暴いて攻める』というやり方は、善人かつ小心者のイヴには、まるで向いていなかったのだ。

それでもイヴは、主人公が困りつつもどこか嬉しそうで、ニヤニヤしている事に安心する。

自分の失敗プレイさえ受け入れてくれる主人公への愛情が、さらに深まっている。

もっとも主人公にとって、そんな事は当たり前すぎて、意識さえしていないのだが……。

イヴ、中央に戻る。

### ●中央 至近距離

「うきうきと。主人公が優しくて、この件について全く怒っていない事で『やっぱりこの人の事大好き!』という気持ちになっている」

だから、怒ってないったら♡

【少し間をあけてから。

だが、それはそれとして、主人公がなんだかニヤついている事は指摘したい】

てか『許して』って言ってる割には、なんかニヤニヤしてない？

「まるで、そうである事を確信しているかのように。」

しかし実際は『確信している』というよりも『そうであつたら嬉しい』と思っている状態」  
もしかして、私にやきもち妬かれるのが嬉しいの？」

あ♡ ……バレちゃった。

もしかして、わたしの顔、そんなにデレデレしていたでしょうか……♡

〈主人公〉

「実を言うと結構嬉しいです……♡」

しかしここで照れながら主人公が認めると、なんだか空気が一気に甘ったるくなった。

●中央 至近距離

「きゃっきやと嬉しそうに。」

意地悪を言っているのに声が弾んでいる。ものすごく嬉しい」  
わあ、マジか♡ 変態だなあ♡ ほんとに♡」

イヴはなんだか安心したようだし、主人公はまだすべてではないが、気持ちの一部を打ち明けて楽になった。

だから主人公は

よかったあ。いつものあまあまな雰囲気に戻ってきた！

と、ホッと胸をなでおろす。

冗談交じりのプレイでも、自分達に『険悪風』は似合わない。いつでも仲良く、いちやいちやしていたいものである。

### ●中央 至近距離

「きゃっきやと嬉しそうに。

意地悪を言っているのに声が弾んでいる。ものすごく嬉しい」  
先生のばーか。

【※1回※ キスする。自分から、音を立ててちゅぽつとしたキスをする】  
ちゅっ♡」

またそれは、イヴも同じようだ。

自分からこの話題を吹っ掛けてきたくせに、ずいふんとホツとした様子である。  
やはり『これはよくなかったのではないか』と心配だったのだろう。

そう。どれだけ親しくなっても、イヴは油断するとすぐ気持ちをうまく伝えられなくなり、遠慮がちになる。

だから主人公が常に、多すぎる位愛情表現をして『大丈夫だよ』と伝える必要があるのだ。

### ●中央 至近距離

「少し間をあけてから。

もじもじと切り出す。

ここから※マークのセリフ終わりまで、全体的にもごもごと、恥ずかしそうに話す。

勝手にA V所持の件を掘り起こしてしまった事がだんだん申し訳なくなり、自分なりに埋め合わせをしようとする」

ていうか。言ってくれたらさ。あげるのに。

【恥ずかしそうに、もごもごと。

『A Vの代替品になりそうなもの』を考えた結果『自分のえっちな自撮り』を思いつくが、主人公はこれをよしとはしないだろうと思う。

なので、やめておく。自分も主人公のえっちな自撮りは正直欲しいが、『欲しい』と空

想するのが良いのであって、実際に撮影してもらおう気などないからだ」  
エロ自撮りとかは無理だけど。

【そこで、さらに別の案を考えた結果、下着の提供になる。

正直な所、主人公の匂いがする衣服なら非常に欲しいし、これなら問題なさそうだ。これは、恋人の匂いがする事が重要なのであって、だから別に下着でなくてもよいのだが『おかず』として渡すなら、定番はショーツだろうと考えて」

ぱんつとか。なんかそういう、おかず的なもの。欲しいならあげるよ？

【さらに『そもそも、自分が駆けつければいいじゃないか』と思う。

これはこれでやりすぎなのだが、申し訳なさが加速するあまり、ちよつと過剰になって  
いる】

それにさ、しなくなったら別に、本物呼んだっていいんだから。

同じ建物の同じ階なんだし、危ない事ないでしょ。

【自信がないなりに、必死に自分をアピールし始める。

主人公が自分の胸を気に入っている事は理解しているが、実はイヴは自分の大きな乳輪がコンプレックスだ。

『見栄えが悪い』とか『個人的に好きではない』と思っているのではなく『個性的なので、主人公好みじゃなかったらどうしよう』と捉えている。

その上、話しているうちに己の面倒くさい性格に気づいてしまった。

客観的に『これなら、無理に自分を呼び出すより、AVを観る方が気楽ではないか』と  
思い始め、その結果、なぜかみゆ役の女優さんと張り合い始める」

確かに女優さんの方が、顔も、おっぱいも綺麗かもしれないけど……。

あんな風に身体柔らかい人としたら、色んな事とか、できるのかもしれないけど。

私のだったら、いつでも触（さわ）れるし。好きにして、いいんだから。

ね？」※

〈主人公〉

「イヴちゃん……♡」

SE3 主人公がイヴに抱きつく音

【最初から最後まで流す】

そんなイヴの複雑な心境を知って知らずか、主人公、たまらなくなつてイヴに抱きつく。  
それから思う。

もう、どれだけ健気なんだ、この子は！

仮にわたしが欲求不満で困つてたとして、それをイヴちゃんがどうにかする義務なんか

ないのに。自分でなんとかしとけて話なのに！

ダメだダメだ、やっぱりわたしが間違ってた。

こんなかわいいイヴちゃんに秘密なんてダメ。ちゃんと全部説明しなきゃ！

と。

●中央 至近距離

「抱きつかれて驚く。とても嬉しい」

わ♥

〈主人公〉

「そうじゃないっ ♥ そうじゃないよっ ♥ イヴちゃん ♥」

主人公、甘々な声でイヴの後ろ向きな意見を否定すると、両手でイヴのほっぺたを包み、ふちゅつとキスをする。

イヴはそれを、驚きつつも嬉しそうに受け入れる。

●中央 至近距離

★「【※30秒※】キスされる。しばらく唇をふさがれたようにキスされた後、その後、一回ごとにちゅぱちゅぱ音を立てまくる、バカツプルなキス」★★★★★

んー……♡

んっ♡ んっ♡ んー……♡ んっく、ちゅっ♡ ちゅっ♡ ちゅぱっ♡ ちゅっ♡

ちゅっぱ♡ ちゅぱあっ……♡

【少し間をあけてから。

甘々の媚びた声で。

嬉しいが、何が『そうじゃない』のか、よくわからずにいる】

えっ？ 何？ そういう事じゃ、ないの？」

〈主人公〉

「そうだよ♡ だって、わたしの見たい身体はイヴちゃんのただだもん。

この作品を観たのもね。

わたしにとっての一番は絶対イヴちゃんで、どんな人を見てもそれは変わらない事を一確かめたかったからなんだよ♡」

●中央 至近距離

「甘々の媚びた声で。



とても嬉しいが、主人公が具体的に何を言いたいのかはまだよくわからない。  
ひとまず主人公の主張を要約する」

先生的には、私の身体が一番すけべなの？」

### 〈主人公〉

「そお♥ あかね、今まで言っていなかったけど、わたし実はイヴちゃんのおっぱいの中でも、特に乳輪が大好きなのね。

ちよっとおっきめなところとか、色白おっぱいに淡いピンクの輪っかができてる感じが、すごいえっちだなんて思ってるわけ」

### ●中央 至近距離

「甘々の媚びた声で返事しつつも、意外過ぎて驚く。

とても恥ずかしい。

だが、イヴにとって乳輪は『主人公好みではないかも』と思う心配の種だったので、それが勘違いであつたと知って、とても気持ち晴れやかになる。

なのでひそかに感激しつつも、ひとまず主人公の主張を要約する」

へっ？ あっ。先生、私の身体の、そんなところ見てたの？」

〈主人公〉

「そうです♡

だから『他の女の人に比べて、イヴちゃんの乳輪のおつきさってどのくらいなのか？』って知りたくて、わたしはこのAVを観たのです」

●中央 至近距離

「【意外過ぎて驚くとともに、とても恥ずかしい。

だが『確かにそれなら理屈が通る』とも思い始める」

AVも、それを確かめるために観たの……？」

〈主人公〉

「そうです♡」

勢いに任せてストレートに言うと、多少は爽やかというか、バカな情熱の結果である事が伝わったようだ。

イヴは疑うというよりも『その発想はなかった』とポカンとしており、これなら、主人公の努力次第で、ちゃんと誤解が解けそうだ。

対するイヴは、とても恥ずかしくはあるものの、悪い気はしない。

コンプレックスの一つだった乳輪が、実際には主人公に熱心に好まれていた。これを知った事で、とても安堵したのだ。

だが、それにしてはまだ気になる点もある。

なので、緩む頬は抑えきれないままに、質問を重ねる。

●中央 至近距離

「とても嬉しい。だが、先ほどの自分の解釈が正解だとしても、この説明だけではまだ安心できない。

なので、詳細を知ろうとする。また、もっともなつつこみを入れる」

嘘だ♡

だってこれ、女優さん二人だけでしょ？ サンプル少くない？」

〈主人公〉

「ちがうよ♡ 本当は後、六人もいるんだよ！」

●中央 至近距離

「少し間をあけてから。」

驚くが、それ以上に『合点がいった』という感じで。

ここで色々納得する。

イヴ自身先ほどから、この作品の総再生時間の長さを不思議に思っていたので「え、ほんとはもつといるの？」

## 〈主人公〉

「おります。一回作品一覧画面まで戻って、それから、タイトルのリンクをタップしてみてください。そしたら『作品紹介』のページに移るから。

それを読んだら、他にもたくさん女優さんが出演してる事がわかるよ」

## ●中央 至近距離

「【素直に主人公の指示に応じる】

あ、ここ？ タップして『作品紹介』読めばわかる感じ？

【少し間をあけてから。

画面を見て、内容を把握してから喋っているイメージで。

作品紹介ページのパッケージ画像に、明らかに別人と思われる女性が複数確認できたので」

あ。……ほんとだ。

【少し間をあけてから。

いよいよ納得するとともに、自分が大きな勘違いをしていた事を理解する】

あー……そっか。大体同じお話を、違う女優さんで、何回もやるAVなんだね。

【少し間をあけてから。

ここから『どうして自分はこの可能性に気づかなかったんだろう？』という感じになつてくる】

だから三時間もあるんだ……。

なんかずいぶん長いなあって思ってたんだよね。

【少し間をあけてから。

もごもごと恥ずかしそうに。特に、『乳輪』をぼそっと、恥ずかしそうに言う。

正直な所、大きめである自覚はあるので】

じゃあさ。つまり先生は。

私の、その。

……乳輪、が。

他の人よりおっきいのかどうかを、確認したくて見たの？」

〈主人公〉

「そうです……♡」

肯定すると、イヴが恥ずかしそうに、でも嬉しそうに、上目遣いでこちらを見た。  
とうとう納得してくれたようだ。

ちゃんと服を着ているのに、サツと手でおっぱいを隠すような仕草をするのが可愛らしい。

●中央 至近距離

「甘々に怒る。」

呆れつつも嬉しい。また、納得のいく説明だったので、安心する」  
もお。変態すぎ……♥ そんなに私のおっぱい好きなの？

「『そうです』と言われたいので、あえてたずねる」

女優さんのプロ乳（ちち）より、私のがいいの？」

〈主人公〉

「そうです！ イヴちゃんのえっちなおっぱい最高♥」

●中央 至近距離

「息づかいだけで表現する。恥ずかしいが、とても嬉しい」

……♡

【恥ずかしいが嬉しい。

ストレートに褒められた上、主人公にとって、自分は芸能人以上だと言われたので】

あ、あ。そうなんだ……♡

【少し間をあけてから。とても恥ずかしそうに。

乳輪の大きさがコンプレックスだった件を打ち明ける】

あのね。自分ではおっきいの、ちよつと恥ずかしくて。

自信なかったんだけど……。

【だんだん声が弾んでくる。

嬉しい気持ちがいじわりと溢れてきたので】

そっか。先生は好きなんだ。……そっか♡」

〈主人公〉

「そうだよ♡

……でも、ごめんね。見つけた時に、正直に言えばよかったよね。  
わたしもちよつと、言うの恥ずかしくて……」

● 中央 至近距離

「甘々に媚びた声で。コンプレックスが一つ解消されて、とても幸せ。

また、これによって素直になるタイミングを得て、先ほどの件を正直に謝る」  
ううん。私こそごめんね。

ほんと先生がどんなえっちな見ようと、先生の自由なのに。

『むー』というのは『面白くなって、むっとした気持ちになり』という意味」  
つい『むー』ってなって、暴くみたいな事しちやって。

【少し間をあけてから。

甘々な声だが、真面目に謝る】

ごめんね。許してくれる？」

〈主人公〉

「もちろんだよ♡」

●中央 至近距離

「【※1回※】キスされる。

まさに『なかなかおりのキス』という感じの、優しくて静かなキス」  
ん♡

【少し間をあけてから。



幸せに照れ笑いして」

へへ……先生、大好き♡

【少し間をあけてから。

甘々な声で誘う】

じゃあさ？　なかなかおりのえっちしょ？

このAVと同じ。足上げておまんこくっつけるのしょ♡

【少し間をあけてから。

現状この点で『みゆ』に勝つ事は不可能だが、頑張りたいという気持ちで私の足。あの人は上がないけど。

頑張るから♡

……ね？」

ここでフェードアウトして終了。